

生糸改良にかけた生涯

—自伝と日記の現代語訳—

富岡製糸場世界遺産伝道師協会歴史ワーキンググループ 現代語訳

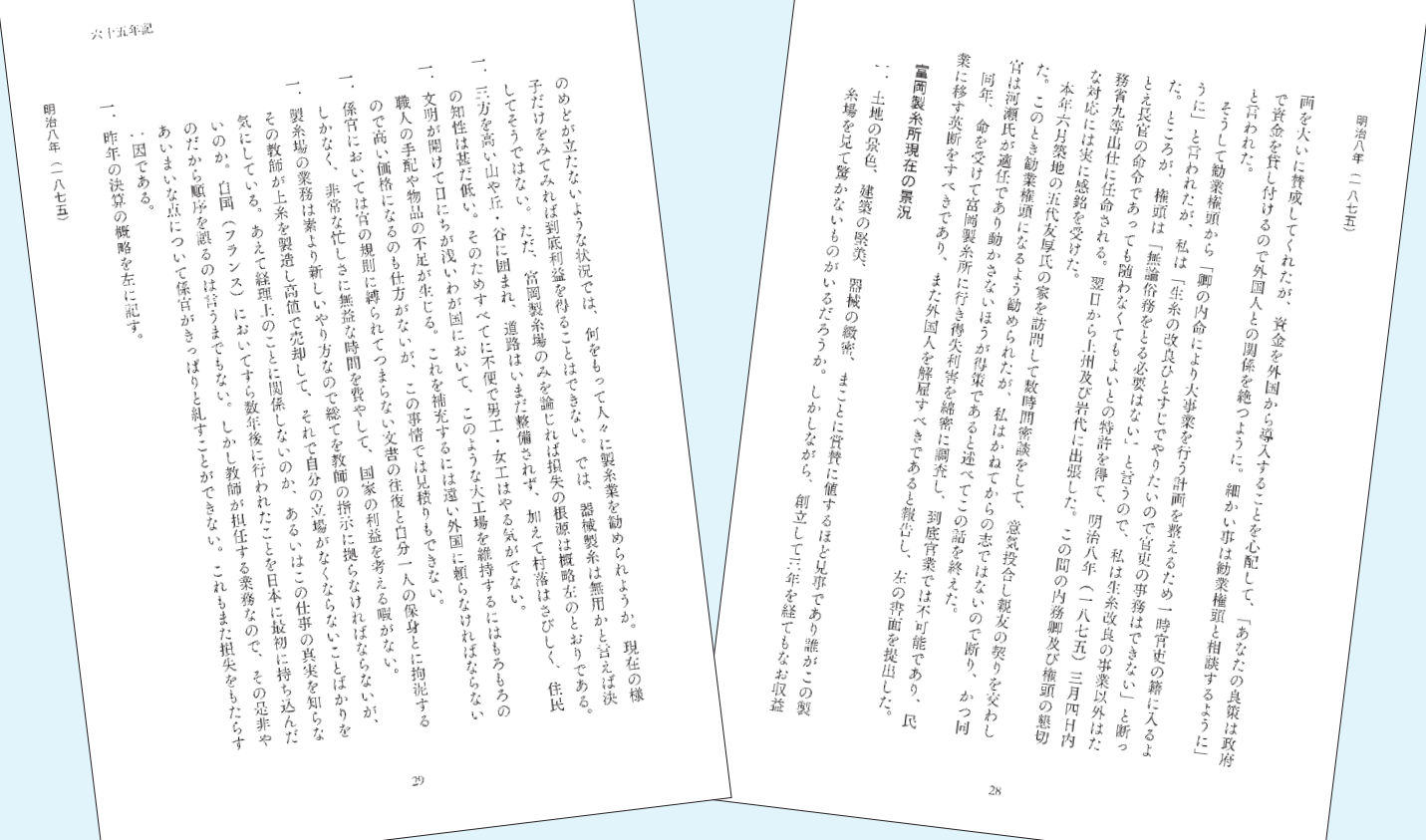
速水堅曹——富岡製糸場に先駆けること2年、明治3年(1870)に前橋藩の下級武士であった彼は、わが国ではじめての器械製糸所「藩営前橋製糸所」をつくった。その先見の明と高い志で日本最高の製糸技術者となり、富岡製糸所長としても活躍した。彼の大きな功績は、開国したばかりのわが国で、まだ家内工業でつくられていた生糸を、器械化によって“良質で均一”な品質のものを大量に生産する製糸産業に育てあげたことである。それによって生糸は国益となり、日本の近代化を推し進めた。それは常に海外の市場動向に目を配り、世界の良質な生糸がどのような品質とコストであるかを理解し、無駄をはぶいて技術革新に努めるという、現代の“ものづくり日本”に通じるものであった。本書は、速水堅曹が自ら記した自伝「六十五年記」と日記『履歴拔萃』を現代語に訳したものである。「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産となった今こそ、近代製糸業の礎を築いた速水堅曹の功績を振り返ってみることもよい機会だと思ふ。是非この機会にお読みいただければ幸いである。



A5判 / 380頁
定価 1,800円(税別、送料込み)

発行 飯田橋パピルス
販売 株式会社パピルス

内容見本



ご購入の際は、下記 URL からお申しいただくか、FAX にて直接お申し込み下さい

速水堅曹翁の自伝(二)

米國万国博覧会(三十六歳より五十歳に至る記事)より)

明治九年になり、かねてからの大事業を起さうとしたが、政府において多額の歳入不足が生じ実行することができなかった。内務卿は非常に思い切つて官庁・官吏の整理をして歳出を減らすための調査をなされた。

この間私は、米國万国博覧会に行つて将来の生糸改良に大いに役立つことを見出して行くやうにとの命令により、同國に渡航し繭糸織物等の審査官を勤めた。この時私は各國の審査官を論破して第一人者となり、主任となつて發章の階級を定めた。そして歐洲の製造人へも本業の利害についてしばしば解説をおこなつた。

また、生糸の需要者である米國繭織物業者に富田・神籬兩氏の紹介で面会をして、将来米國への直輸出等を約束した。面会した順序はおおよそ左の通りである。

- 黒琥珀(中二十四インチ) 甲斐絹類(中二十四インチ)
- 桃色琥珀(中二十インチ) ヌメ織白(二十二インチ) その他各種

右いずれも染色製造共に良好である。繭糸は層糸紡績が多く日本糸を繭糸にするより

六十五年記

明治九年(二八七六)

需要が多いとのことである。論議が多いことである。それからシルク・アソシエーションに行き、事務員に会い統計表等を見、ビー・リチャードソン氏方に行き生糸を見る。

日本・中国・イタリア等の生糸を見ると日本糸と称するのは提糸だけで、その巻紙を非常に批難していた。上糸はまだ入荷していないようである。封印判ははっきりしておらず横浜の外人の奸策によるものであろうか。

神籬氏と共にエロー氏兄弟の会社に行き生糸を見る。巻紙を倉庫の入口に山のようにこの会社においても日本糸と称するものは提糸だけであることを話しても聞く耳も持たず信じ束ねて激しく批難していた。そこで日本にも上糸があることが封印判はわからなかつた。束ねて激しく批難していた。提糸は全部フランス人より買入れたとの事であるが封印判はわからなかつた。

七月二十日富田・神籬の両氏と共にバターソンに赴き(中略)直ちにデール氏宅に行き一通り見学した。生糸繰返し器械が一階、紡績器械が一階、打紐きなど真面目も繭器械六百が二階あり合わせて四階になる。また別に職工器械の一種もあり、驚くべき企業である。また、ストレー

デール氏宅を出て、エー・リレリアク氏宅に行き見学する。右と同様である。また、ストレーンチ氏宅に行つて見学しても大同小異であり、ハミル氏宅もまた同じである。蒸気器械を使用しており、品物に色斑点がなく申し分がない。

●「生糸改良にかけた生涯」購入申込書●

FAX 03-5215-7004

お名前			
送り先	〒	部数	冊
団体名			
部署名			
電話	()		

ご購入の際は、下記 URL からお申しいただくか、FAX にて直接お申し込み下さい

発行：飯田橋パピルス / 販売：株式会社パピルス

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-25-11 九段中央ビル TEL 03-5215-7001 FAX 03-5215-7004 URL www.papyrus.co.jp